

# てこな・ミュージック・ジャーナル

## コーヒーのお話

### ●バッハのコーヒー・カンタータ

J.S.バッハに「コーヒー・カンタータ」という作品があります。宗教音楽の巨匠と目されているバッハとコーヒー、どこか結びつかないようですが、実際は依頼主の要望に応じて誕生祝いなど、世俗カンタータを多数書いています。

カンタータとは筋を語るように歌うレチタティーヴォと主人公が思いなどを歌うアリアからできていて、いわば演技を伴わないけれど、表現豊かな音楽劇のようなものです。バッハが作ったものの例を挙げますと、誕生の祝いに「太鼓よとどろき、ラッパよ響け!」、結婚の祝いに「おお嬉しい日、待ち望んだ時よ」、その他に新年の祝い、新しい領主を迎えて表敬の意を表すためのカンタータなども依頼されています。このような世俗カンタータの中で、ひときわ目を引くのが「コーヒー・カンタータ」です。現在ではこの題名で知られていますが、本来の曲名は「静かに、おしゃべりをやめて」です。

### ●コーヒー伝説

コーヒーの木は温暖な気候と年間1200ミリの降雨量を必要とし、この条件に見合ってコーヒーの原木があったのがアラビアで、そこに「山羊飼いかルディ」の伝説が残っているそうです。山羊が夜、眠らなくなったのは、近くの灌木の実を食べているからではと考えたルディ自身、その実を取って茹でて飲んでみると、眠らなくなったとか。

アラビアに始まったコーヒーはカフヴェと呼ばれ、11世紀には生豆を砕き、煮出して胃病に効く煎じ薬として広まったそうです。やがて豆を炒るようになって嗜好品となり、1517年に現在のイスタンブールに最初のコーヒー店、1652年にロンドン、そして同じころ、パリにもカフェがオープンしました。日本には18世紀初頭にオランダ人が伝え、最初はカッヘイと呼ばれ、まもなく「コーヒー」となり「珈琲」という漢字も当てられるようになったそうです。

### ●コーヒー禁止令

バッハのコーヒー・カンタータが作られたのは1734年です。バッハ自身大変なコーヒー愛好家だったそうですが、1781年、興味深い出来事が起こっています。

## 市川市文化振興財団 音楽総合プロデューサー 小坂 裕子

プロシアのフレデリック大王がコーヒー禁止令を出したのです。その理由は大げさに言うと、コーヒーによって国家経済が破綻しそうになったからです。オランダやフランスにはインドやブラジルに植民地があり、そこでのコーヒー栽培が国益に大きな貢献をしていました。ところが、プロシアにはそのような植民地がありませんでした。庶民までこぞって飲むようになったコーヒー消費の増大は、ビールの輸出で稼ぐ外貨収入をはるかに超えて、国の経済を危うくするほどのものとなったのです。コーヒー税を増やしても消費が減らないという事態となり、とうとう王室が焙煎を独占することを布告したのです。

### ●コーヒー・カンタータ

さてバッハの「コーヒー・カンタータ」には、半世紀後、フレデリック大王が「禁止令」を出すことになる時期が来ることを予測させるほどの、庶民の熱中ぶりが歌われています。

登場人物は娘と父親です。

コーヒーを止めさせようとする父親と、コーヒーはたくさんのキッスよりもワインよりも美味しいから、日に3度は飲みたいわという娘。流行の服も、祝宴に出るのも、散歩もだめと父親が奮しても効果はありません。結婚も許さないとと言われて、泣く泣く娘はコーヒー断ちを決心…。心の中ではやっぱり、結婚相手にコーヒーを許すことを約束させるつもりです。

### ●バルザックの「近代興奮考」

「人間喜劇」などで知られる19世紀の大文豪バルザックに「近代興奮考」という著作があります。当時、酒、タバコ、コーヒー、紅茶、砂糖が猛烈な普及ぶりで、社会そのものを変容させかねないほどの勢いだと書いています。バルザック自身、机の上には大変な濃さのコーヒーポット。あおるように飲んで夜中まで10時間ペンを走らせ続けていたそうです。

さて最後に、ちょっと残酷なお話をしましょう。バルザックによりますと、死刑囚に絞首刑の代わりにコーヒーまたはチョコレートを選ばせ、それだけでどれだけ生き延びるかの実験が当時イギリスで行われたとか。結局、コーヒーは2年、チョコレートは8ヶ月という結果に終わったと書いています。

さてモーツァルトも大変なコーヒーファンでした。ベートーヴェンはコーヒー豆を60粒と決め、1、2、3と丁寧に数え、その声を隣の部屋で聞かされる客人はとても恐縮したそうです。因みにショパンの健康法は毎朝チョコレートを飲むことでした。